

『いるかだより』で織り上げた

いじ色のいるか織り

新山 裕之

昨年の四月、レインボーブリッジを渡った私は、二年保育の五歳児二十八名を受け持つことになりました。にじのはし幼稚園・年長 いるか組。

心優しい子どもたちと個性輝くお母さんたち、そして多くの人たちと共にいくつもの素敵なドラマが生まれました。そして迎えた三月。子どもたちの自信に満ちた瞳、たくましい姿に目を潤ませたのは、担任の私だけではありませんでした。子どもたちにかかわる多

くの人たちとその感動を分かち合うことができたのです。

子どもたちの育ちの根幹を支えるのは、やはりお母さん、お父さんです。ですから幼稚園での保育の充実と子どもたちの成長を願うとき、お家の方々と幼稚園が車の両輪になっていくことが必要です。そして昨年は合計七十号の学級通信『いるかだより』がその両輪をつなぐ重要な役目を果たしてくれたように思いま

す。

折々の子どもたちの様子を知らせ、時には問題提起もしました。また、活動の意義を伝え、呼び掛けをし、お母さんお父さんにも保育に多くかかわってもらうことができました。そのお陰で子育てを一緒に考える、大人も子どもも共に育つにじのはし幼稚園の保育のスタンスができたように思います。

今回は、悲喜こもごもを綴ったその『いるかだより』の中からいくつかをご紹介します。



※九月末、港陽学園大運動会ともいえる合同の運動会がありました。併設の小中学生と一緒に楽しく競技をしたいと、幼稚園から積極的にアプローチして、忍者運動会ともいえる取り組みを実現しました。

9 / 22 第26号

幼・小・中がひとつ屋根の下で暮らすという恵ま

れた環境にあるにじのはし幼稚園。行事の時はもちろん、普段の生活の中でも独立園では経験できない、いろいろな人とのかわりができるというメリットがあります。

人とのかわりが苦手な子が増えています。電車に乗っても、買い物してもひとこともしゃべらずに済ませることができ世の中になってしまいました。便利にはなりましたが、相手がどんなことを考えているのか表情から察したり、氣遣ったりする機会は減りました。

生活する中には自分以外の人がいることを知らなければなりません。そして自分が気持ち良く生活するためには、自分だけでなくお互いに気持ち良くなるようにという発想が必要です。しかし、欲しいものは簡単に与えられ、分け合うことも、譲り合うことも経験する機会がない子は逆に増えています。

いるか組も決して例外ではありません。ちよっと

体が触れただけでけんかになったり、友達が座るところを探していても気が付かなかつたり（もちろん、たまにあるという程度に減ってきていますが）……ということがないわけではありません。

そんな子たちに、身近な人とかかわる経験をたくさんさせてあげたいと思います。いろいろな人とかかわることです。いろいろな立場の自分を体験できませぬ。兄弟のいない子は、お兄さんお姉さんにやさしくしてもらって経験や逆に我慢する経験をするかも知れませぬ。

そんな願いも含めて、にじのはし幼稚園は港陽小・中学校と合同で運動会をします。五・六年生と一緒に遊んだり、忍者服のビニール袋を届けに行ったり、先週からは小中と合同の競技の練習も始まりました。大きい子には多少恥ずかしさもあるかも知れませぬが、みんながひとつのイメージをもって遊び心も働かせながら楽しめるようにと、幼稚園の忍

者の遊びに加わってもらうことにしました。

いろいろな人とのかわりの効果は子どもたちだけのことではありません。私自身も、

小中の児童生徒、教職員の方々とかわること

とで、幼稚園にただけでは気付かなかつたいろいろなことに気付き、たくさんのことを学んでいきます。

中学生に忍者運動会の意味やおもしろさを話に行ったり、小学生に忍者体操を踊ってみせ、一緒にペロペロ怪獣をやっつけたりと、園児とは違う反応の仕方に戸惑つたりもしました。でも、共通するところもあつて、今回のかかわりを機に今後いろいろな形で楽しいかかわりをもちたいと、運動会



が終わらぬうちからもう先のことを考えたりもして
います。



※子どもたちのお気に入りになっていた忍者の遊びを
運動会につなげました。忍者の遊びは、お台場の忍
者と架空の敵「ペロペロ怪獣」との戦いを軸に、様々
な活動を生みました。忍者のイメージを受けてお母さ
んたちが妖精になってくれて、新しいストーリーが加
わったこともありました。

そして、描画や製作、生活発表会で劇にして演じた
ことなどはまさに、今求められている総合的学習その
ものと言えると思います。修了の際には、一年間のそ
のドラマをみんなで描いて絵本を作りました。タイト
ルはズバリ『お台場忍者物語』。製本もお家の方に協
力してもらい、お世話になった方々にも差し上げまし
た。

※もう一つ、生き物と共に暮らすことも保育の中の大
事な柱でした。そして冬の初め、可愛がっていたハム
スターのさんちゃんが死んでしまったときの子どもた
ちの動きには、唸らされるものがありました。



12/10 第43号

十二月七日。私にとって忘れられない日になった
その日のことを少しづつお知らせします。

中略

いつもは「おーい、元気か？」と家の中のティッ
シュをどけると中から「なんだい、まだ寝てるの
に」と眠そうな目をした顔を出してきます。でも、
かごに手を入れても暖かさが伝わってきません。何
かひんやりした、いつもとは違う気配が感じられま
した。もしか、と思った心配は的中してしまいまし
た。

いるか組の子どもたちと共に生活するようになって

て、子どもたちの姿を見て、この子たちにはぜひ生き物とのかかわりが必要と感じていました。ですから、六月にインコやうさぎを飼おうとしたときに、全員での話し合いをしたのでした。それ以来、たくさんさんの思いを込めて、生き物たちと生活を共にしてきました。

何人かの言葉を聞いた後、○ちゃんが絵を描きあげて持ってきました。そして、「何て言ってあげる?」と聞いた私に、○ちゃんはこう言ったのです。

「長い間、ありがとう」

朝から私の側に来て、静かにさんちゃんを触ったり、抱いたりしていく子どもたち。絵を描きまじょうと言ったわけでもないのに、始めた遊びを中断してまでさんちゃんの絵を描いている子どもたち。さ

んちゃんの死は悲しいけれど、そんな子どもたちの心の成長をうれしく感じていました。

そこへ、このひとことです。一気に込み上げてくるものを押さえることができなくなり、涙があふれてきて止まりませんでした。あれ?と気が付いた子に「先生どうしたの、何で泣いてるの?」と聞かれ、「だって、さんちゃんのことをこんなふうに思ってくれているなんて。そんな心が…」と説明しようとしたのですが、言おうとすればするほど涙が止まらず、メガネを外して顔を押しさえてしまいました。

当の○ちゃんは私が泣いたのを見て最初はびっくりして逃げていってしまいました。ところが、次に△ちゃんが「私、紙に書いてきた」と言って、絵と一緒に別れの言葉を小さな紙に書いて持ってきてくれたのです。それを見て、私はまた、うれしくてうれしくてうれしくて涙があふれて止まらなくなりましたのです。

その紙にはこう書いてあったのです。

「まいにち まいにち あいしてるよ」

子どもの感性を育てなければなどよく言いますが、この言葉を大人の口から聞くことができるのでしょうか？

何て素直なこの感性。子どもにはかないません。進んで絵を描き始めた姿、一人じゃ寂しいから仲間も描いてあげようと言いながら描く姿、さんちゃんの名きがらをそつと触る姿、そして、心がほつと暖かくなるような素敵な言葉。先生泣かないでと言ってくれた子もいました。どれをとっても、豊かな感性そのものです。



私も、子どもたちも、『いるかだより』も、心ある多くの人に支えてもらった一年間でした。

子どもたちはたくさんのことを学び、大きくなりま

した。しかし、たくさんのことを学んだのは、実は子どもたちよりも、幼稚園にかかわった大人たちのほうだったような気がします。

その中でも私はきつと一番たくさんの宝物をもらうことができました。お台場の海の底・龍宮城の乙姫様からにじ色のいるか織り（そんな布があったら素敵です）をもらったという感じですが。本当にありがたいことでした。私にとっては夢のような一年間でした。

そして今年。幼稚園は新しいメンバーを迎え、幼稚園にかかわる人たちと一緒に、みんなが育つ幼稚園作りをさらに加速させています。

今年度、私は年少かもめ・そら組の担任。学級通信のタイトルは『かもめファセラシド』です。

さて、今年はどうな出会いとドラマが生まれるか、とにかくたのしみ。

（東京都港区立にじのはし幼稚園）